

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

二〇一四年度

第一回 全統高2模試問題

国語

二〇一四年五月実施

(八〇分)

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は21ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。(「受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の該当する解答用紙を切り離し、所定欄に **氏名**(漢字及びフリガナ)、**在学高校名**、**クラス名**、**出席番号**、**受験番号**(受験票発行の場合のみ)を明確に記入すること。
- 五、指定の解答欄外へは記入しないこと。採点されない場合があります。
- 六、試験終了の合図で右記四、の **■** の箇所を再度確認すること。
- 七、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

□ 1 次の記事を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

近代の政治理論は主権という概念を作り出すとともに、これを立法権として定義した。ところが、法の制定と法の適用の間には大きなギャップがある。法の制定だけでは、法の適用を十分に制御することはできない。それ故、法の適用、すなわち行政に<sup>a</sup>タズサ<sup>b</sup>わる行為者が実際の統治をソツセン<sup>b</sup>して進めるという事態が発生した。しかも行政は、建前の上では法を適用しているに過ぎない。つまり、行政は決められたことを粛々と実行する執行機関に過ぎないと見なされている。この建前がある以上、主権を担う者がわざわざそこに首を突っ込む必要はないことになる。

近代の民主主義の場合、主権の担い手とされているのは民衆であるが、その主権の行使は立法権に部分的に関わること、すなわち選挙によって代議士を議会に送り出すことにはほぼ限定されている。なぜそれにもかかわらず民衆が主権者と言われるのか、すなわち、なぜそのような政治体制が「民主主義」と言われるのかと言えば、立法こそが主権を行使する場であると定義されているからである。

法を適用する側、すなわち行政は、実際には様々な物事に決定を下しており、事実上の統治を担っている。しかし、行政は執行機関に過ぎないという前提があるため、主権者たる民衆はそこにアクセスできない。

では、この近代政治理論の欠陥<sup>1</sup>に端を発する近代民主主義理論の欠陥をどう正していけばよいだろうか？ そのためにまず、いったいどのような発想でこの課題に取り組んだらよいかを考えたい。

近代の議会制民主主義については、一九世紀以来、多くの疑問が投げかけられてきた。議会は一部の支配階層が牛耳っている。多数派の意見しか通らない。民意を反映していない。議会なのに少しも議論などしていない……。今も議会に対する批判は繰り返されている。確かに議会には問題がある。

だが、それを根本から変えるなどというのは実に難しい。だから、「根本から変えなければダメだ」という主張は多くの場合、あきらめか、あるいは革命への待望に至る。

X

では、どうすればよいだろうか？

ここで参考になる考え方ががある。現代フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは、一八世紀イギリスの哲学者デイヴィッド・ヒュームや、フランス革命時の政治家サン・ジュストの考えを参考にしながら、大変興味深い「制度論」を展開した。

ドゥルーズは制度と法を次のように対比させて定義している。法とは行為の制限である。たとえば、「盗んではいけない」「殺してはいけない」等々、法は人の行為を制約する。それに対し、制度とは行為のモデルである。たとえば結婚は一つの制度だが、それは生き方のモデルとなる。

社会というものは、多くの場合、法によって人々の行為を制限することで初めて成り立つと考えられてきた。人々は放っておくと何をしでかすか分からないから、法によって縛り付けておかねばならないというわけである。自然状態を戦争状態として考えたトマス・ホッブズの社会契約論がその典型である。この場合、社会の起源には、人々を縛り付け、行為を制約する法が見出されることになる。

それに対しドゥルーズは、ヒュームの哲学に「イキョ<sup>こ</sup>しつ、複数の制度が組み合わさって構成されているのが社会だと考えた。たとえば人々の私有に対する欲求を満足させるために所有制度が作られた。労働を有効に活用するために分業の制度が作られた。共同体全体に関わる物事を決めるために寄合<sup>よりあい</sup>の制度が作られた。制度とは創意工夫によってもたらされる手段のことであり、社会とはこの手段の組み合わせによって成立しているというわけだ。

このように考える時、法は社会の起源に見出されるものではなく、制度の後に来るものと考えられることになる。所有制度が作られたから盗みが起こることになり、それを禁止する法が必要になる。結婚制度が作られたから、重婚が禁止される。ここから見えてくるのは、法という否定的・消極的なものによってではなく、制度という肯定的・積極的なものによって社会を定義する新しい社会観である。

ドゥルーズはこの議論を国家の政治制度にも拡張する。法は行為の制限であるから、法が多ければ多いほど国家は専制的になる。それに対し、制度は行為のモデルであるから、制度が多ければ多いほど、国家は自由になる。制度があつて初めて可能にな

る行為の数がどんどん増えるからである。言い換えれば、何か満足を求めたり、目標達成を目指す際の、手段が増えるということだ。

ドウルーズはサン・ジュストの大変興味深い議論を紹介している。「今は余りにも法がありすぎて、余りにも市民制度がなさ過ぎる。我々は市民制度を二つか三つしかもっていないのだ。アテネにもローマにも、たくさんの制度があった。私は制度が多ければ多いほど、人は自由になると考える。制度は君主制下では少なく、絶対専制下ではなお少ない。専制はたった一つの権力に牛耳られているが、この力を弱めるためには、制度を増やしてゆくしか道はない」。

ここからドウルーズは次のような結論を導き出す——専制とは、多くの法とわずかな制度をもつ政体であり、民主主義とは、多くの制度とごくわずかの法をもつ政体である。

この制度論から議会制民主主義を見直すと、これまでとは全く異なる視点が得られる。<sup>2</sup>議会制には大変多くの問題がある。そのためこれまで多くの議論が、議会そのものの改善のために費やされてきた。たとえば、民意がよりよく反映されるためにはどのような議会であるべきか、多くの人がシンケン<sup>d</sup>に考えてきた。

しかし、別の発想が可能ではないだろうか？ 議会は私たちが政治に関してもっている制度の一つに過ぎない。ならば、制度をもっと増やすという考え方ができるのではないか？ 多くの制度をもつ政体を目指すことが可能ではないだろうか？

なぜ議会制民主主義の改善を目指す議論は、議会そのものの改善ばかりに目を向けてしまうのだろうか？ その理由は議会制民主主義そのものに見出されるだろう。議会制は、すべての政治案件を議会に集約して処理することを目指す体制である。つまり、議会制は政治を一元的に処理することを理想としている。

この理想は強固なものだ。そこに、議会制民主主義における人民主権ないし国民主権のすべてが賭けられているからである。だから、この理想の実現は人々の心をつかんで離さない。人は何としてもそれを実現しようとしてしまう。議会制を巡る議論までもが、議会制の理想と同じく一元論的な発想になってしまう理由は、おそらくここにある。

しかし、実際の政治は一元的に決定されているわけではない。議会だけが決定を下すなどというのは嘘であって、役所や官庁

や警察など、議会以外の様々な機関で政治や社会に関わる決定が下されている。つまり実際には多元的に決定されているのだ。ならば、主権者である民衆が政治に関わるための制度も多元的にすればいい。つまり、議会という制度は一つの制度として認めた上で、さらに制度を追加していけばいい。確かに議会は重要な制度であるから、この改善はもちろんだ。しかし、議会の改善だけでなく、それと同時に、それと平行して、制度を追加していけばよい。「制度が多ければ多いほど、人は自由になっていく」。

主権とは立法権であるという建前があるために、主権者たる民衆は行政による決定のプロセスから排除されているのだった。ならば、行政の決定にこの主権者が関わるような制度を作っていけばいい。立法府だけでなく、行政府にも主権者が関われる制度を作っていけばいい。そうすれば、近代の政治哲学の誤りを少しづつゼセイしていくことができる。根本から変える必要はない。革命も必要ない。

Y

(國分功一郎『来るべき民主主義』)

問一 傍線部 a ~ e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

X

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群のA～Oの中からそれぞれ

一つずつ選び、記号で答えよ。

X

- ア どちらも要するに何もしないということである
- イ とすれば現状に即して改善するしかないだろう
- ウ いずれも民意を反映した一つの解決策ではある
- エ 何もしないよりは革命の方がよいに決まっている
- オ どちらを選ぶかは要するに民意にかかっている

Y

- ア 立法権を弱めていけばいいのだ
- イ 行政改革をしてはいけないのだ
- ウ 制度を足していけばいいのだ
- エ 自然の流れに従えばいいのだ
- オ 立法と行政を均衡させればいいのだ

問三 傍線部1「近代政治理論の欠陥」とあるが、これはどういうことか。四十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部2「議会制には大変多くの問題がある」とあるが、ここである「問題」について説明したものとして間違っているものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 議会は民意をよりよく反映するものであるべきなのに、一部の支配階層に牛耳られている。

イ 議会は民主的に運営されるべきなのに、実際は多数派の意見しか通らない仕組みになっている。

ウ 現在の議会制民主主義においては、主権者であるはずの選挙民の意見が法の制定に反映されていない。

エ 議会が一元的に運営されていることに象徴されているように、実際の政治は多元的に行われていない。

オ 議会で満足な議論がなされていないことに示されているように、議員が自らの職責をまっとうしていない。

問五 傍線部3「制度が多ければ多いほど、人は自由になっていく」とあるが、その理由を筆者はどのように考えているのか。

「法」と「制度」との違いに触れつつ、百字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 立法権を統治の根本に置いている限り、たとえ間違った法であっても、建前上行政は決められたことを肅々と実行するしかない。

イ ホッブズは、法を欠いた自然状態は野蛮状態であり、法の制定によってはじめて人々は社会秩序を手にすることができると考えていた。

ウ 所有制度に違反するものとして事後的に窃盗の罪が生まれたからには、窃盗の撲滅<sup>ばくめつ</sup>のために所有制度を廃止すべきである。

エ 市民制度が二つか三つしかないフランス革命時の現状を見て、当時の政治家サン・ジュストは革命政府が専制的であると断じている。

オ 近代民主主義において、選挙によって選ばれた代議士が政治を支配するため、民衆は行政に関わることができずにいる。カ すべての政治案件を一元的に処理するという理想があまりに強固なため、人々の政治改革の発想までもが一元的になっている。



【二】次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

世紀を跨いだ頃から、「国民総幸福度」が、国情、ないしは国家の発展を測る指標として人口に膾炙するようになった。「国民総幸福度」でいう「幸福」は、国民の満足感の多寡で測られ、その満足感ほさらに健康や心の安らぎ、寿命の長さ、失業や事故の少なさ、仕事と生活の調和などの観点から測られる。そしてそれを裏づける指標を求めて、「幸福に関する実証研究」なるものに取り組まれるようになっていく。

しかしいざ「幸福とは何か」というふうにその定義をなそうとすると、それは日々の暮らしに満足できていることだとはかたんに言えないことがあきらかになる。そもそも何を満足とするかについて、意見の一致を見ることは少ないからである。

人間の行為はみな幸福をめざしているという点については、おそらく異論はなからう。だが、いざこの幸福が何であるかと問いはじめると、意見はちりぢりになる。快樂だ、名誉だ、富だ、健康だ、というふうにある。けれども、快樂や名誉や富や健康、さらにはそれらを手に入れるための知恵や技能は、幸福になるためには望ましいものであっても、その逆はありえない。つまり、快樂や名誉や富、知恵や技能を手に入れるために幸福になるということはありえない。そういう意味で、アリストテレスは幸福を「自足した善」と呼んだ。つまり、「いかなる場合にもけつして他のもののために追求されることのないもの」、「つねにそれ自体として望ましく、けつして他のもののゆえに望ましくあることのないようなもの」、それが幸福であるとしたのである。

が、そういう「自足的な善」を、個人の主観的な満足感、あるいは「安樂」という個人的な充足感と考えることは、あまりに単純すぎる。

まず、ひとは幸福の渦中にいるときはそれを幸福として意識しえず、それを失ったときにはじめてそれが幸福であったと知ることがある。「あのときは幸福だった」というふうには、幸福は失ってはじめて切にわかる。それに、あるとき幸福を感じても幸福感というものは長続きせず、凡庸な日常へとすぐになら均されてしまうのがつねだ。幸福は感覚としては持続しない。

「やっと試験が終わった」「きょうは出かなくていい」といったときのほっとした感覚に見られるように、幸福とはむしろ移行の感覚のことであり、幸福になればもはや幸福とは感じない、つまり色褪<sup>あ</sup>せてしまう。幸福にはこのように、だれもが幸福でありたいと願うのに、幸福と思っていたものを手に入れたとたんに幸福でなくなる、あるいは幸福でいつづけることはできないという、そのような **A** がまとわりついている。また、ある時点で満足だと思っていたものが、振り返ってとんでもない思い違いだったと気づかれることもある。ことほどさように、幸福は不幸に、不幸は幸福にたやすく裏返る。「禍福は糾<sup>あひま</sup>える縄の如し」とは司馬遷の言葉である。このように見てくると、幸福に関しては、内容からはどうも十全に規定できなさそうである。

ところが、二十世紀末になって国際社会が、環境危機やエネルギー資源の枯渇、金融市場やそこでのマネーゲームがもたらす地域社会の崩壊や格差の拡大などの問題に直面するなかで、「経済成長」が幸福の条件であるという神話への **B** が生まれ、初めに挙げた「幸福度」といった視点が登場することになった。では、昨今、「国民総幸福度」という国家発展の評価軸や、「幸福経済学」という名の実証研究など、<sup>1</sup>「見幸福論と見えるもののインフレーション<sup>注1</sup>」が起こりつつあるその理由は何だろうか。

この擬似的な幸福論を「安楽」への全体主義と呼んだのは一九八五年の藤田省三である。かれはこの表現において、「安楽」を不快のない状態としてとらえ、「不快の源そのものの一斉全面除去（根こぎ）」へと向かう傾性に、「不愉快な事態との相互交渉が無いばかりか、そういう事態と関係のある物や自然現象を根こそぎ消滅させたいという欲求」を見た。ここで根こぎ（殲滅<sup>せんめつ</sup>）というのは、不快な事態と対決するよりも、むしろそうした対面の **C** そのものをあらかじめ消去してしまうということである。<sup>注2</sup>デオドラントからさまざまの社会的抑圧や失調の「見て見ぬふり」まで、安楽の喪失に怯<sup>おび</sup>えながらその源の消去の作業に人びとは神経症的に合流してゆく。

「安楽」への全体主義、いいかえると「安らぎを失った安楽」という未曾有<sup>b</sup>の逆説を目の当たりにして藤田が憂えたのは、<sup>c</sup>紆余曲折の克服から生まれる「喜び」という「総合的感情」がこれとともに消失してゆくことであった。「苦しみとも喜びとも結合しない享受の楽しみは、空しい同一感情の分断された反復にしか過ぎない」。「遠方を見る視力」が失われることで、忍耐、工夫、持続といった徳もまた消えてゆく。わたしたちは先ほど幸福とは移行の感覚だと言ったが、この移行は、藤田のいう

ように、さまざまの忍耐や工夫を積み重ね、それらをとりまとめてゆくなかでまさに生全体のあり方への D としてあり、  
紆余曲折を経て生まれる「喜び」としてそれを享受したときに幸福として感受されるものなのであろう。「幸福とは何か」とい  
う問いは、得たものの大きさではなく、失ったものの大きさに比例して深まってゆく。いいかえると、自身もしくは他者が失っ  
たものの想像力の強度に比例して、深まってゆくものなのであろう。

幸福への問いがインフレーションを起こしているのは、たしかに幸福感の薄さ、ないしは（働き場や交友関係といった居場所  
を見いだせないという意味で）見棄てられて、いるという感情が、今日、想像を超えて人びとのあいだに浸潤してきているからだ  
ろう。しかも、社会システムが異様に複雑化してきたなかで、そうした失調の理由を人びとはますます見透すことが困難になっ  
ている。幸福への道筋が見えないのだから、幸福そのものについてもじぶんの存在にとつて偶然的なめぐりあわせとしてしか意  
識されようがなくなる。そう「幸運」としてである。籤くじに当たったり、美味しいものにありついたり、人びとは小さな幸運に  
めぐりあわせたとき、ピースサインとともに「ハッピー」「ラッキー」と口走る。

ここで、めぐりあわせということで一つ注意しておきたいのは、めぐりあわせは「運」のそれであるとともに他者とのそれ  
でもあるということだ。めぐりあわせの喪失、それを柳田國男はかつて「孤立貧」と名づけた。<sup>(注3)</sup>「共同防貧」というエートス(注4)を  
失ったところに生まれた貧困の孤立化をさしていることである。個人が、家族や地域社会などの共同体から切断されて、おのれの  
困窮に独り孤立して向きあうしかないという状況である。ここでは、「共同防貧」のしくみがあつた時代の、他人が不幸でい  
るあいだはわたしは幸福であつてはならないという感覚もまた消失してゆく……。「ひとりて幸福になろうとしても、それは無理  
よ」——寺山修司は、ある年配の言葉としてこれを記録したのだが、もしそのように幸福は他者との共作であるのだとすれば、  
<sup>(注5)</sup>  
「あなたは幸福ですか」という問い自体がすでに E だということになる。

古来、「殺してはいけない」という徳目がある。が、この徳目をそれだけ口にするのであれば、きれいな事で終わる。そこには  
影が、奥行きがない。道徳を後代に伝えてゆくためには、たしかに理屈抜きで「ならぬものはならぬ」と言わなければならぬ  
ところがある。けれどもそれは、守るべきものでありながら、実際にはそれを守りきれなかったという苦い思いで裏張りされて

いなければ伝わらない。「絶対に人を殺してはいけない。けれどもわたしたちは実際にはいつぱい人を殺してきた。殺さなければならぬときもあったし、軽い気持ちで殺したこともあったかもしれない。あるいは、やむにやまれず殺したことも。それでもなお、人はやはり殺してはならない……」といった語り口で、影の部分もろとも語りださなければ人には伝わらない。それとおなじで、幸福を語るときにも、ひとは不幸に浸る時間を削ってはならない。そのうえで「幸福」という青空<sup>2</sup>について語りつづけること。この揺れと強度を欠いた幸福論はついに絵空事で終わる。

(鷲田清一「幸福論の幸不幸」)

(注) 1 インフレーション……一般的物価水準が継続的に上昇し続ける現象。ここでは増加しているという意味。

2 デオドラント……体臭や汗の臭いを防いだり、取り除いたりすること。

3 柳田國男……民俗学者。(一八七五～一九六二)

4 エートス……特定の社会集団を特徴づける気風・慣習。

5 寺山修司……歌人・劇作家。(一九三五～一九八三)

問一 傍線部 a、b、c の語句の意味として最も適当なものを、次の各群の ア、イ、エ、オ の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

a 人口に膾炙する

- |   |           |
|---|-----------|
| ア | 数値に換算される  |
| イ | 人々に誤解を与える |
| ウ | 世間に広く知れ渡る |
| エ | 人為的に作られる  |
| オ | 悪いうわさが流れる |

b 未曾有

- |   |             |
|---|-------------|
| ア | 今までに一度もないこと |
| イ | 危機が迫っていること  |
| ウ | 常識では有り得ないこと |
| エ | 想像が及ばないこと   |
| オ | つじつまが合わないこと |

c 紆余曲折

- |   |             |
|---|-------------|
| ア | 実現するのが難しいこと |
| イ | 失敗を繰り返すこと   |
| ウ | 自己嫌悪に陥ること   |
| エ | 複雑な経過をたどること |
| オ | ひとときわ苦労すること |

問二 空欄

A

E

を補うのに最も適当な語を、次のア～キの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ語を二度以上用いてはならない。

ア 虚構      イ 目的      ウ 懐疑      エ 機会      オ 逆説      カ 主題      キ 評価

問三 傍線部1「一見幸福論と見えるもののインフレーションが起こりつつあるその理由は何だろうか」とあるが、「その理由」についての筆者の考えとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 環境危機や格差問題に直面するなかで、経済成長を幸福の条件としてきたこれまでのあり方を見直す動きが強まっていることが、経済的な豊かさや国情に左右されない「幸福度」を評価軸とする幸福論の隆盛につながっている。

イ これまでの幸福の基盤であったはずの自然環境や地域社会が崩壊してゆくにつれ、多くの人々が不遇感や疎外感を抱くようになった結果、困難に耐え、前向きに努力することで幸福になると説く幸福論が社会的な支持を広げている。

ウ 社会システムが複雑化し多様に変化していくなかで、多くの人々が幸福への道筋を見透し難くなっていることが、不快な事態を排除した目先の安楽さを追い求め、満足感を指標とする幸福論の流行を生む背景となっている。

エ 家族や地域社会などの共同体の解体によって孤立した個人が、自己の生活の満足に幸福のよりどころを求めるようになった結果、職場や交友関係における満足感のみを幸福とみなす擬似的な幸福論が広く受け入れられるようになった。

オ 国際社会が経済成長の限界に直面するなかで物質的な豊かさを求めることが困難となり、屈託のない気楽さに幸福を実感する人々が増加するにしたがって、精神的な安らぎで「幸福度」を測る俗流幸福論が市民権を得るようになった。

問四 傍線部2「この揺れと強度を欠いた幸福論はついに絵空事で終わる」とあるが、これはどういうことを言ったものか。筆者の考えに即して、百字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 人間の行為がすべて幸福をめざしているという固定観念から解放されることで、はじめて人は幸福を享受することができる。

イ ある種の快樂を幸福と感ずることもあるが、幸福は他の快樂などの手段とならず、それ自体が目的だととらえる説もある。

ウ 幸福感は個人によって異なるうえに、一過性の変化しやすい感覚であるため、幸福の内容を定義することは難しい。

エ 不快なものが人々の不幸を招くのなら、その根源を元からすべて一掃するのも、現代人が取るべき一つの選択肢と言える。

オ 幸福は偶然的なめぐりあわせとして意識されるものであるから、たとえ小さな幸運であっても大切にする気持ちが重要である。

カ たとえ道理にかなった幸福論であっても、あえて邪悪なものに触れなければ、その正しさは人に伝わらない。



〔三〕 次の文章は『平家物語』の一節である。平家討伐を企てた、藤原成経（少将）、平康頼（康頼入道）、俊寛僧都の三人は、謀議が発覚して、鬼界ヶ島（現在の鹿児島県奄美群島に属する島）に流された。そこで、かねてから紀伊国（現在の和歌山県）の熊野三山に祀られる神（権現）を信仰していた成経と康頼は、鬼界ヶ島にも熊野と似たような場所があるのを見つけ、そこを熊野本宮に見たてて参詣していた。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

ある日、本宮に詣で、<sup>(注1)</sup> 法施をつくづくと手向けたてまつりてありければ、<sup>(注2)</sup> いつよりも信心肝に銘じ、<sup>(注3)</sup> 五体に汗出でて身の毛よだち、権現金剛童子の御影向もたちまちにある心地して、嵐<sup>(注4)</sup> X 吹き下ろして木の葉かつ散りけるに、<sup>(注5)</sup> 南木の葉二つ、康頼が膝に散りかかるを見れば、一つは「帰雁」と虫食ひたり。一つには「二」文字を食ひたり。また、よくよく見れば、歌を一首、虫食ひたるを見出だしたり。

Y

神の斎垣を頼む人などか都へ帰らざるべき

康頼入道、「これを御覧候へ。この島には南木は候はぬに、この葉の出できたり候ふは」とて、少将にたてまつる。少将取りて見て、「<sup>(注3)</sup> あら不思議や。今は、権現の御利生にあづかりて都へ帰らんことは一定なり」とて、いよいよ<sup>(注4)</sup> 祈念せられけるに、康頼入道、申しけるは、「入道が家には、蜘蛛だにも下がりぬれば、昔よりかならずよろこびをつかまつり候ふが、今朝の道に小蜘蛛の落ちかかり候ひつるに、権現の御利生にて、少将殿召し返されさせ給はんついでに、入道も都へ帰り候はんずるにやと思ひて候ひつるなり。さても、<sup>(注5)</sup> 『帰雁』<sup>(注6)</sup> 』と読まれて候ふこそ、あやしく候へ。いかさまにも、残りどどまる人候はんずるとおぼえ候ふ」とて、涙を流して下向せられけり。

(注) 1 法施……仏などに對し、経や法文を唱えること。

2 影向……神仏が仮の姿をとってこの世に現れること。

3 南木……マキ科の常緑高木。熊野地方に多く、神木とされる。



4 蜘蛛……蜘蛛が現れると吉事があるという俗信があった。

問一 二重傍線部 a～f の動詞を、それぞれ終止形に直して答えよ。

問二 空欄 X には形容詞「すごし」が入るが、適切な活用形に直して答えよ。

問三 空欄 Y に入る枕詞として、最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア あしひきの      イ たらちねの      ウ ひさかたの      エ ぬばたまの      オ ちはやぶる

問四 傍線部 1 「なか都へ帰らざるべき」の解釈として、最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア きつと都へ帰ることができるはずだ。  
イ どうしても都へ帰らずにはいられない。  
ウ どうあっても都へ帰らないつもりだ。  
エ どうして都へ帰ることができないのだろう。  
オ なんとかして都へ帰りたいものだ。

問五 傍線部 2 「たてまつる」・4 「あやしく候へ」を、それぞれ現代語訳せよ。

問六 傍線部 3 「あら不思議や」とあるが、それはなぜか。わかりやすく説明せよ。

問七 傍線部5 「涙を流して下向せられけり」とあるが、なぜ康頼は涙を流したのか。わかりやすく説明せよ。

問八 『平家物語』と異なるジャンルである作品を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 保元物語

イ 義経記

ウ 源氏物語

エ 太平記

オ 曾我物語

国語の問題は次の頁へ続く。

四 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、送り仮名を省いた所がある。)(配点 四十点)

夏英公<sup>すゐたろふ</sup>帥<sup>二</sup>江西<sup>ニ</sup>日、時<sup>ニ</sup>豫章<sup>よしやう</sup>大疫<sup>イニ</sup>。公<sup>ニ</sup>命<sup>ジテ</sup>医<sup>ニ</sup>製<sup>シテ</sup>薬<sup>ヲ</sup>分<sup>セシム</sup>給<sup>二</sup>居民<sup>ニ</sup>。

医<sup>ヒテ</sup>請<sup>ク</sup>日、「薬<sup>モ</sup>雖<sup>スト</sup>付<sup>ニ</sup>之、恐<sup>ラクハ</sup>亦虚設<sup>タラント</sup>。」公<sup>ニ</sup>曰、「何<sup>ノ</sup>故<sup>ソト</sup>。」医<sup>ニ</sup>曰、「江西之

俗<sup>たつとヒ</sup>尚<sup>ヲ</sup>鬼<sup>ズレバ</sup>信<sup>ふヲ</sup>巫<sup>いへどモ</sup>、每<sup>リト</sup>有<sup>二</sup>疾病<sup>一</sup>、未<sup>三</sup>嘗<sup>ヤク</sup>親<sup>ビ</sup>薬<sup>ニ</sup>餌<sup>一</sup>也。」公<sup>ニ</sup>曰、「如<sup>クンバ</sup>此<sup>ノ</sup>則<sup>チ</sup>民

死<sup>スル</sup>於<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>命<sup>カラン</sup>者<sup>ニ</sup>多<sup>ト</sup>矣。不<sup>カラ</sup>可<sup>テ</sup>以<sup>ル</sup>不<sup>セ</sup>禁<sup>止</sup>。」遂<sup>ニ</sup>下<sup>シテ</sup>令<sup>ヲ</sup>捕<sup>ヘテ</sup>為<sup>ス</sup>巫<sup>ヲ</sup>者<sup>ニ</sup>杖<sup>セシム</sup>之。

其<sup>ノ</sup>著<sup>ナル</sup>聞<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>黥<sup>げい</sup>隸<sup>シテ</sup>他<sup>ニ</sup>州<sup>一</sup>。一<sup>ニシテ</sup>歳<sup>一</sup>、部<sup>ニ</sup>内<sup>ムル</sup>共<sup>コト</sup>治<sup>一</sup>。一千九百余家。江

西<sup>①</sup>自<sup>リ</sup>此<sup>レ</sup>淫<sup>ニ</sup>巫<sup>ム</sup>遂<sup>ニ</sup>息<sup>ム</sup>。

(『独醒雜志』による)

(注) ○夏英公……北宋の人、夏竦のこと。英公は尊称。

○帥江西……江西地方の洪州の長官であった。

○豫章……地名。洪州の中心都市。

○大疫……疫病が大流行する。

○虚設……むだになる。

○鬼……鬼神。

- 巫……みこ。神の言葉を取り次ぐ者。
- 杖……棒でたたく刑に処す。
- 著聞……世間によく知られている。
- 黥隸<sub>二</sub>他州<sub>一</sub>……刑罰として入れ墨をし、他の州に追放する。
- 部内……管轄内。
- 治……正常な状態にする。
- 淫巫……邪悪なみこ。

問一 傍線部⑦「如此」、①「自」の読みを、すべて平仮名で記せ。

問二 傍線部⑧「命」、⑨「息」と同じ意味の「命」「息」を含む熟語を、次の各群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

⑧ 「命」				
ア	イ	ウ	エ	オ
命令	命題	延命	運命	生命

⑨ 「息」				
ア	イ	ウ	エ	オ
安息	終息	生息	令息	利息

問三 傍線部①「葉雖<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>之、恐亦虚設」を現代語訳せよ。

問四 傍線部②「未<sub>三</sub>嘗親<sub>二</sub>葉餌<sub>一</sub>也」を書き下し文に改めよ。

問五 傍線部③「不<sub>レ</sub>可<sub>三</sub>以 不<sub>三</sub>禁 止<sub>二</sub>」の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 医者が薬を作ることを禁止しなければならない。

イ 医者が薬を作ることを決して禁止してはならない。

ウ 民が薬を飲むことを全く禁止するつもりはない。

エ みこが民を惑わすことを全く禁止するつもりはない。

オ みこが民を惑わすことを禁止しなければならない。

問六 傍線部④「下<sub>レ</sub>令 捕<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>巫 者<sub>二</sub>杖<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>」とあるが、夏英公が「巫を為す者」を捕らえて処罰したのは何のためか。四十字以内（句読点等を含む）でわかりやすく説明せよ。



© Kawaijuku 2014 Printed in Japan

無断転載複写禁止・譲渡禁止